

思い出のマーニー

泣きたい時に泣きたいだけ
泣かせてくれるような人がいたらいいのに

両親がおらず、人にも物事にも無関心な態度をとる少女アンナは、療養のためにひと夏を海辺の村の老夫婦のもとで過ごすことになる。そこでアンナは同い年の孤独な少女マーニーと出会い、彼女の暮らす古い屋敷を毎日のように訪れるようになる。しかし、村人は誰もマーニーのことを知らないという……。

今月中旬よりジブリ制作の映画が公開されるこの作品。映画では舞台を北海道に移しているが、原作ではイギリスの港町が舞台となっている。そこで描かれているのは少女アンナの成長物語。常日頃から疎外感を感じて自身の殻に閉じこもった無気力な少女が幾多の出会いを通じて、少しずつ心を開いてゆく。ゆったりと時間が流れ、どこことなく暗い前半部と、開放感に満ちた後半部。その違いには彼女の心の変化が表れているに違いない。

この作品の特徴として情景描写の美しさあげられる。海鳥の鳴く様や夕暮れ時の空の色、潮の流れやその満ち引きといった自然の姿、そして主要な舞台となる古い屋敷をはじめとする村の様子……。それぞれが精微に、かつ魅力的に描かれている。また、これらが繰り返し描写されているために読者は想像力を喚起させられ、この話の世界観へとより深く引き込まれていく。

そして、そうした情景から伝わってくるさまざまな感情。たとえば、誰もいない無人の屋敷に灯りがともっているのに気づいて慌てて駆け寄ったが、それはただたかさんの窓に夕焼けが映っているだけだった、というシーン。直接的にアンナの感情は描かれていないが、文章が大変視覚的であるが故に、より一層アンナの切なさや寂しさが伝わってくる。

物語終盤にて明かされるマーニーの正体やアンナの生い立ち。その驚きの結末とともに得られる読後の幸福感や温かさはとても言葉では言い表せない。映画を観る前、または観た後に読んで各々を比較してみるのもよいだろう。温もりや優しさを求める全ての人におすすめしたい作品だ。(冬雪)



『思い出のマーニー』 上下巻
著者：ジョン・ロビンソン
訳：松野正子
出版社：岩波書店
定価：各640円（税抜）